

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0847 ◆◆◆

25/07/02

【ドル/円は2ヵ月連続小動き、7月に「復権」なるか注目】

今週初に終了した6月相場は、月間変動5.65円(142.38-148.03円)となった。今年最小の変動幅といった汚名は免れたが、それでも前月を下回る内容にとどまるなど、いまひとつの結果に終わった感を否めない。

先週もレポートしたように、ここ最近の相場の主役は完全に「ユーロ/ドル」へと移行している。20日に注目の参院選が実施され、下手をすると石破首相から次の首相へ交代だけにとどまらず、自民党が政権の座から滑り落ちる可能性すら取り沙汰されているだけに、「今月こそは」ーと円絡みで大きな動意を期待しているが、果たしてどういった結末を迎えるのだろうか。

◎日米関税交渉、参院選ーと「円絡み」の注目材料多い

恒例となっている月間の見通しを指摘する前に、まず過去の7月ドル/円相場星取表をみると、1990年以降昨年までの35年間で実に17勝18敗。ほぼ五分の内容で、方向性的にはどちらが有利ということはないようだ。

ただし、2020年以降昨年までという直近5年だけに限れば、すべて「ドル安・円高」へと振れている。その流れ、「相場の継続性」という観点から、6年連続のドル安・円高有利を見込む参加者も決して少なくない。

そんな7月のドル/円相場を、別の観点から見た場合、ひとつ興味深い事象がうかがえる。それは参加者が徐々にサマーバカンス入りするため流動性が乏しくなることもあってか、過去の7月相場は「動くか動かないか比較的極端な値動きをたどることが多い」ーということだろう。

もちろん動かないパターンも決して少なくはないのだが、ここ最近では逆に「動く7月相場」のパターンが優勢となっている感がある。その典型は昨2024年で、月間を通して実に12.35円(149.61-161.96円)の変動を記録していた。もちろん、昨年の月間変動としてはダントツの1位となる。

一方、前段リード部分で指摘したように今年のドル/円は5月そして6月と小動き。やや積極性を欠く値動きとなっているだけに、「3ヵ月連続の小動き」を警戒する向きもいるにはいるが、果たして結果は如何に。

幸か不幸か材料的に見た場合、足もとの7月は日本に絡む注目材料が決して少なくないだけに、前月までの反動とも言える大きな値動きを期待なかばで取り沙汰する向きもある。

その典型例は、先でも触れた20日の参院選であり、それとも絡む話だが、9日に期限切れを迎えるなか、果たして日米の関税交渉は決着を見ることが出来るのだろうか。赤沢再生相が訪米し7回目の協議に挑むも、自身が「五里霧中」と表現した「関税交渉の状況は変わらない」(6月30日・記者会見)と発言。そののちトランプ米大統領から、「日本との貿易合意できるか疑わしい」などといった最後通牒ともいえるコメントも発せられていた。

ちなみに、そんな日米貿易協議について、2日付の日経新聞では三井住友銀行・宇野大介チーフストラテジストの発言として「関税が無難に着地するとみている企業が多い」ーなどと報じていたのだが、本当だろうか。筆者はもちろん逆の感覚で、「最悪の事態」を考慮しておく必要がある気が大いにするのだが…。いずれにしても、それらを波乱要因として、7月相場で円絡みの取引が復活化、相場の主役を奪還するとの期待も抱いておきたいと思う。

最後にニュースの観点から過去の7月を見ると、ひとつ興味深いのが為替あるいは金融に関する重要な事象が決して少なくないこと。幾つか例を挙げると、「米国の通貨が『ドル』に決定(1785年)」や「NZ外為市場閉鎖(1984年)」、「リラ暴落でイタリア市場が一時閉鎖(1985年)」、「アジア通貨危機がはじまる(1997年)」ーなどとなる。

また金融関係以外でも、別に「米国が英国からの独立を宣言(1776年)」や「ウォーターゲート事件でニクソン大統領の弾劾可決(1974年)」、「ロッキード事件で田中前首相逮捕(1976年)」など、歴史的に重要な出来事が相次いでいた。

ノーベル平和賞の受賞に意欲をみせるトランプ米大統領のさらなる尽力により、「ウクライナ戦線」もしくは「北朝鮮」において、恒久的とまではいわないものの、なんらかの和平交渉が 7 月に進展することを多少なりとも期待している、と願望半分で指摘しておきたい。(了)

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。